

研究テーマ	[Ⅱ 想い（発想・想像・構想）を広げ、深めること] 発想力，構想力を高めるための表現や鑑賞の活動について
-------	---

取手市立小文間小学校 教諭 荒井 喜宏

1 研究テーマについて

発想力や構想力は，児童が様々な学習や生活体験の中で高めていくものであるが，図画工作科の授業においては，表現及び鑑賞の活動全体を通して児童が試行錯誤を繰り返す中で高めていくものである。発想力とは，自分なりに造形的な感覚や感受性を発揮して，いろいろなことやものなどから感じ取り，想像力を働かせて自分の表現の意図や想いなどを心の中に思い描く能力である。また，構想力とは，想像力を働かせて，それらをより膨らませながら，よりよい方向や方法などを考える能力である。

では，これらの能力を高めるために，図画工作科の学習においてどのような工夫や手だてが効果的であるのか，以下ア～オにまとめてみた。

- | |
|--|
| ア 多様な発想を促す題材名の工夫
イ 五感に訴える題材の開発
ウ 事前の手だて
エ 豊かに構想させる手だての工夫
オ 鑑賞活動の充実 |
|--|

ア 題材名の工夫については，自分で教材開発した題材は勿論のこと，教科書の題材でも検討の余地がある。例えば，高学年の題材：箱の特徴を生かして，伝え合うものをつくるでは，「BOXアート・メッセージをこめて」，「世界に1つだけの不思議な箱」など意欲付けや児童の発想や表現を限定せず，豊かな発想を促すようなものにしたい。

イ 五感に訴える題材の開発においては，図画工作科の場合，視覚は勿論のこと聴覚，触覚も有効に活用するものとしたい。聴覚の活用例では，物語の朗読（印象的な語りや効果音など）からイメージを深めたり，楽曲そのものをテーマにしたたりする作品づくりがあげられる。触覚においては，造形遊びや工作は当然のこと，絵画においても砂絵や様々な素材を使ったコラージュ製作など視覚だけではなく触覚に訴える題材も設定できる。また，普段は，自由に使える画材や色数を限定することにより発想力を刺激する題材も有効である。（実践例①に示す。）

ウ 事前の手だてでは，児童の発想が授業前に教科書の参考作品を見たり，必要な材料を集めたり



アイデアカード（資料①）

するところから、すでに始まっていることを意識すれば、学年便り（または、週の時間割等）で題材や材料など事前に知らせておく必要がある。事前に印象的な予告を行うことで、児童の製作への意欲や発想を刺激したい。

エ 豊かに構想への手だての工夫では、製作への見通しをもたせる製作カードや事前のアイディアスケッチの活用が有効である。（資料①）

オ 鑑賞活動の充実では、児童が対象物を見たり、聞いたり、さわったりする経験を積み重ねることで、受容、分析、批判、選択といった能力が培われることを大切にしたい。それらの能力が表現における発想力、構想力を高めることにつながることから、児童のより主体的な鑑賞活動を目指したい。（実践例②に示す。）

2 研究の内容

実践例①

(1) 題材名 青色の世界へ

(2) 目標

- 青一色で表現される空想画に関心をもち、意欲的に製作に取り組むことができる。
(関心・意欲・態度)
- テーマから想像を広げ、アイディア豊かに画面構成ができる。(発想・構想の能力)
- 自由な線描やこすりの技法を生かして、形のおもしろさや単色の濃淡を効果的に表現できる。
(創造的な技能)
- 表現の工夫やよさ、製作者の想いを感じ取ることができる。(鑑賞の能力)

(3) 題材について

本題材で使う画材は、青（正しくは藍色）の色鉛筆とケント紙だけである。普段、自由に使える色数を単色に限定したり、自由に線描させた後に形探しをしたりすることで発想力を刺激しながら製作を進めたい。色鉛筆は、高学年の児童にとっては身近なものであり、画材というよりも観察スケッチやグラフ作成に使う文房具のイメージが強い。しかし、身近な道具ながら色鉛筆を用い書き込んで描くという経験をした児童は、少ないのではないだろうか。単色の色鉛筆の濃淡だけの表現は、紙の白さを生かしたり、思いきり書き込んだり、こすってぼかしてみたりと意外に奥が深く難しい。テーマは、写生のような具象よりも「未来のレジヤ」「夢の動物園」「シャボン玉から広がる世界」のような空想画が向いている。

(4) 指導計画（3時間扱い）

時	本時の目標	学習活動及び内容	観点別評価				評価 規 準	
			関	発	技	鑑	A 十分達成	C 不十分
1 （ 15 分 ）	・表現のテーマやこすり等の表現技法を意欲的に知ることができる。	○表現するテーマや単色の色鉛筆の表現について知る。 ・テーマの確認 ・描画練習（濃淡）	◎		○		青一色の限定された表現におもしろみを感じ、意欲的に表現技法を知ろうとしている。	単色の表現におもしろみを感じられず、技法についても関心が薄い様子である。

2 (75 分)	・テーマから想像を広げ、こすりの技法や紙の白さを生かし、色鉛筆を用いて美しく濃淡で表現することができる。	○テーマから想像を広げる。 ○線描やこすり等の表現を生かし、青一色の色鉛筆で、自由に絵を描く。	○	◎	線や形のおもしろさからイメージ豊かに構想し、線描や濃淡、こすりの技法等を駆使して効果的な色鉛筆の表現をしている。	自由な空想の世界が広がらず、画面構成が単調である。色鉛筆の濃淡の表現にめりはりが無く、線描の表現も生き生きとしていない。
1	・お互いの表し方の工夫やよさ、美しさを味わうことができる。	○相互鑑賞会を行う。	○	◎	作品に関心を寄せ、表現のよさや制作者の想いを感じ取ることができる。	鑑賞会への関心が低く、表現のよさや工夫をあまり感じ取れない。

(5) 学習の実際

素材や色数を限定することで、発想や構想を刺激すると共に、製作にも集中することができる題材となった。小学校高学年から実践可能であるが、単色の色鉛筆の描画や濃淡による表現は容易でないので、上記のようなワークシートの活用やぼかしの表現などの技能的な事前指導が指導が重要に思う。事前の指導が適切でないと自由な発想を引き出せず、書き込んだ青いべた塗りのアクセント、ケント紙の白さ、ぼかしの奏でる美しい画面構成を味わうことは難しい。

色鉛筆でグラデーションをつくろう
濃淡（のうたん）を表現しよう

年

紙の白 淡 濃
ごくうすく 中ぐらい 一番濃く



参考作品

← 描画練習ワークシート



児童作品 A



児童作品 B



児童作品 C

実践例②

(1) 題材名 作者なりきり鑑賞会（「でこぼこ広場に絵の具が走る」）

(2) 目標

- 作者になりきって友達の作品のよさや特徴を語り、意欲的に表現の意図に迫ることができる。 （関心・意欲・態度）
- 感じたことや思ったことを話したり、話し合ったりするなどして表現の工夫やよさ、製作者の思いを感じ取ることができる。 （鑑賞の能力）

(3) 題材について

作品製作後の相互鑑賞については、児童が製作した絵画や工作作品などを展示し、鑑賞の時間を設け、自他の表現の工夫やよさを鑑賞カード等に記入させる活動がよく行われる。また、自分の作品について、友人に説明する活動も行われるが、その作品が例え力作であったとしても思いの外、作者自身（児童）が遠慮し活性化された話し合い活動につながらないことも少なくない。そこで、発想を転換し、友達の作品を自分の最高傑作として説明する「作者なりきり鑑賞会」を開くことにした。

鑑賞会の事前に児童作品は廊下掲示板に飾り、自由に鑑賞できるようにしておく。作品をデジタルカメラで撮影後、写真 L 版程度にプリントし、鑑賞活動日に裏返して児童に示す。友人の作品選びは、くじ引きのように行わせるが自分の作品を引き当ててしまった場合には、交換などを行う必要がある。ワークシートに友人の作品の写真を貼り付け、自分の最高傑作として題名や作品の工夫点、作品への思いなどを記入させる。主体的に鑑賞活動に取り組むことにより、作品の発想のよさや表現の工夫、作者（友達）の製作への思いを深く感じられるようにしたい。その際、作品のよさや美しさに目を向け、批判的な説明をしないことや短いコメントで終わらないよう発表時間の設定も確認する。発表においては、いかに（作者になりきり）発想のよさや作品の特徴を語り、表現の工夫や作者の意図に迫ることができるように支援していきたい。

(4) 指導計画（1時間扱い）

時	本時の目標	学習活動及び内容	観点別評価				評価規準	
			関	発	技	鑑	A 十分達成	C 不十分
1	・お互いの表し方の工夫やよさ、美しさを味わうことができる。	○相互鑑賞会を行う。 ・作者交換会 ・ワークシートに記入 ・作品発表	○			◎	作品に関心を寄せ、表現のよさや製作者の思いを感じ取ることができる。	鑑賞会への関心が薄く、表現のよさや工夫をあまり感じ取れない。

(5) 本時の学習

展開

学習活動・内容		支援と評価
1	本時のめあてをつかむ。 作者になりきって、作品のよさやくふ	◆教師の支援 ◎工夫点 ☆個への対応 ◆いつもの鑑賞会とは違い、友人の作品の作者になりきって、発表会を行

うを見つけよう。

2 自分の最高傑作品を選び、そのよさやくふうをまとめる。

- (1) 裏返された作品写真を選ぶ。
- (2) ワークシートに作品のよさなどを記入する。
 - ・写真を貼り付ける。
 - ・題名を付け記入する。
 - ・作品のよさや工夫点を記入する。

3 作者になりきって作品の発表会を行う。

- ・作品を前に一人一人が発表を行う。
- ・題名や製作上の工夫を伝える。
- ・作品のよさや表現の意図について話す。



3 学習を振り返り、分かち合いをする。

うことを伝える。

◎くじ引きのように意外性に任せて選ばせるが、選んだ作品は自分の最高傑作品であることを確認する。

◆自分の作品であることから、題名も考えて付けるように話す。

◎コメントは、批判的なものでなく、よさに目を向けたものとし、発表時間は1分30秒を超えることを確かめる。

☆よさや工夫点の記入に時間を要する児童には、ワークシートの写真や実物作品を示し、助言をする。

◎発表用ボードスタンドを活用し、作品を掲示し、発表者と聞き手の近い距離感をもたせて発表を行わせる。

◆時間を計時し、1分30秒以上の発表時間を守らせる。

◆作者になりきって発表している様子や児童のコメントのよさを称賛しながら和やかな雰囲気作りを心がける。

◎評 作者になりきり、感じたことや思ったことを話し、作品のよさなどを見つけることができたか。

(発表・ワークシート)

◆作者なりきり鑑賞会の感想などを自由に発表させ、思いや気付きが分かち合えるようにする。

◆発表会での児童の活躍ぶりなどを称賛し、作品鑑賞の楽しさについて話す。

「作者なりきり鑑賞会」は、教師側の意図する以上に盛り上がり見せ、発表の予定時間を1分以上も超える児童もおり、友達の雄弁な解説に作者自身が苦笑いする何度も見られた。謙遜を美德とする日本人の感性は、高学年児童にもあり、自分が語るのではなく、友達に自分の作品のよさを多く語ってもらう機会は新鮮なものであった。

また、何気なく鑑賞するのではなく、自分が作者となり、解説する活動は、作品の発想よさや表現の工夫を深く味わい、作者(友達)の作品への想いを探るよい機会となった。作者なりきり鑑賞会は、鑑賞の活動に間隔を置きながら取り組むのが適切であり、また有効に思う。作品のよさに目を向けた鑑賞会ではあるが、作者本人の表現

した意図とかけ離れてしまう解釈も出てくる可能性も考えられるので，発表後の分かち合いや感想の時間も十分確保して当たることが大切に思う。

4 参考にした資料

- ・鹿児島県総合教育センター指導資料（図画工作第35号）
- ・NHK 趣味悠々「谷川晃一の自由デッサン塾」
2000年8月発行

「作者なりきり鑑賞会」ワークシート ⇨

